

(4) 教育研究分野の研究内容

出願時の志望に基づき、入学時に以下の分野のいずれかに配属されます。

なお、2023 年度第 2 回目の募集分野に変更があった場合は、HP 等により別途通知します。

生理学・細胞生物学講座

Department of Physiology and Cell Biology

膜動態学分野

匂坂 敏朗 (e-mail: sakisaka@med.kobe-u.ac.jp)

膜動態学分野では、膜の変形による細胞の形態形成機構、膜輸送による細胞内小器官の形成機構について研究しています。それらについて、構成分子とその分子集合体、及びそれらと膜からなる functional unit の同定と機能発現の原理を生化学的手法と細胞生物学的手法の両方を駆使して明らかにします。さらに得られた結果をもとに、それぞれの機能について人工膜を用いて生化学的手法により再構成しています。「膜」と「自己組織化」という観点から細胞機能を捉え直し、生命の統合的理解を目指すとともに、創薬開発に繋がる研究を展開します。

細胞生理学分野

南 康博 (e-mail: minami@kobe-u.ac.jp)

細胞生理学分野では、ヒトをはじめとする哺乳動物における「細胞極性・運動制御や増殖・分化制御の分子機構」、「組織構築や組織損傷修復の分子機構」と「神経分化及び神経ネットワーク形成の分子機構」の解明、並びにこれらの分子機構の破綻とがんの進展・増悪化、炎症や神経疾患などの病態との関連の解明や再生医療への応用を目指して研究を行っています。これらの分子機構を解明する糸口として、特に Wnt タンパク質/Ror ファミリー受容体型チロシンキナーゼによるシグナル伝達経路に焦点を当てて解析を進めています。具体的には、「遺伝子改変マウスを用いた組織/器官・個体レベルでの分子機構・分子病態解析」や「各種培養細胞・がん細胞等を用いた分子・細胞レベルでの分子機構・分子病態解析」を行い、これらの研究をとおして「生体にみられるしなやかさ」の本質を明らかにするとともに、「その破綻による病態」を遺伝子・分子レベルに加えて、細胞・組織/器官・個体レベルでシームレスに解明することにより、新たな診断・治療への応用の基盤を確立することを目指しています。

生理学分野

内匠 透 (e-mail: takumit@med.kobe-u.ac.jp)

こころを理解する：ヒトゲノム計画は医学に莫大な恩恵をもたらしました。病気も分子レベルで理解されるようになり、癌や生活習慣病の理解も深まってきました。このような時代においても、脳はもっとも理解の遅れている臓器であり、脳科学・神経科学領域には沢山の未開拓分野が今なお残されています。もともとは脳（こころ）を分子で理解したいという発想で、脳機能の変異という理解のもと、精神疾患・発達障害に興味を持って研究を進めています。分子から細胞（シナプス）、回路、個体に至るまで多階層レベルでの研究を展開しています。例えば、ヒトのゲノム解析で見出した情報をもとに、ゲノム編集等の最先端技術を用いて細胞・動物（マウスなど）の疾患モデルを作製し、その解析を通して病態の理解を目指すというものです。神経回路や個体レベルでの解析では、回路遺伝学やバーチャルリアリティー・機械学習といった昨今の手技も取り入れられています。ヒト ES 細胞モデルでは、オルガノイド培養でヒト疾患モデル脳が作れる時代です。睡眠・リズムとの関係にも興味を持っています。また、これからの課題としては、臨床を含むビッグデータにデータサイエンスを駆使してどのように脳（こころ）、そしてヒト（の病気）を理解するのに挑戦したいと思えます。

- 1) 自閉症・発達障害・精神疾患の統合的研究
- 2) 概日リズム・睡眠の統合的研究
- 3) 神経科学と情報科学の融合的研究

神経情報伝達学分野

上山 健彦 (e-mail: tueyama@kobe-u. ac. jp)

私達の研究室では、感覚器障害（内耳、網膜）、脳腫瘍、神経変性疾患などを含む神経系疾患の病因・病態究明と治療法開発を、種々の遺伝子改変マウスを用いて取り組んでいます。難聴は、感覚障害中最多の疾患（世界人口の約 5%が罹患。スマートホンの普及により、若者の約半数が難聴になるとの WHO の提言が 2019 年になされた）ですが、根本的な治療法は存在しません。内耳、網膜、脳は、高度に分化した器官・臓器で、視・聴覚障害や神経膠腫を含む悪性脳腫瘍は、今なお難病です。私達は、感覚の受容には、元来【左右差】が備わっているとの仮説を立て、感覚受容の【左右差】こそが、優位脳・利き目・利き耳などの機能極性を生み出す原因だと考え、その成立機序解明と【左右差】を有する疾患の解明を目指しています。私達研究室の最終目標は、上述疾患の新規治療法開発や創薬です。また、人材育成（特に、プレゼンテーション力とディスカッション力）には力を注いでいます。大所高所から状況を判断できる力を鍛え、「新たな発想」「予想外の発見」を生み出す素地を育成します。

生体構造解剖学分野

仁田 亮 (e-mail: ryonitta@med. kobe-u. ac. jp)

生体構造解剖学分野では、「クライオ電子顕微鏡による生命の根幹に関わる生理・病理現象の分子機構解明」を目指して研究を進めています。クライオ電子顕微鏡構造解析技術は、様々な分子の「かたち」を精細な三次元構造として描出することを可能にしました。そして、分子から個体に至る様々なレベルでの構造・機能解析を併用することにより、分子が生体の中でどのように働くのか、また分子の異常によりどのように疾病を発症するのか、を知ることができます。現在、以下のプロジェクトを推進しています。詳細は、<http://structure.med.kobe-u.ac.jp/about-us/> をご覧ください。

- 1) 微小管ダイナミクス制御の生理・病理機構：微小管ダイナミクス・ネットワーク、微小管モーター、細胞極性
- 2) 造血幹細胞の制御システムとその破綻による白血病発症・老化メカニズムの解明
- 3) 新規白血病治療法開発に向けた転写メディエーター複合体の転写制御機構の解明
- 3) 心筋メカノバイオロジー機構の構造基盤の解明
- 4) 神経変性疾患モデル細胞を用いたクライオ電子顕微鏡分子構造解析
- 5) 革新的化合物探索・合成手法による新規抗菌アジュバントの創出

神経分化・再生分野

榎本 秀樹 (e-mail: enomotoh@med. kobe-u. ac. jp)

神経分化・再生分野では、神経系発生の分子機構と神経系の発生異常による疾患の病態誘導機構の解明を目指して研究を行っています。神経系発生と疾患誘導に関する細胞・分子の振る舞いを明らかにするために、遺伝子改変マウスの作製と組織解析を行い、これに細胞生物学、生化学、生体イメージング解析法を機能的に組み合わせて研究を進めています。この取組みの中で、特にヒトの病気の原因遺伝子変異をマウスに導入した疾患マウスモデルの開発は、疾患誘導に関する発生過程、細胞種、分子を同定するために必須であり、その解析は新規治療薬開発において重要な情報を提供します。当分野では、最新のゲノム編集技術を導入して疾患モデルマウスを簡便かつ短期間に作製・解析するシステムを構築しました。当分野に参画する学生には、このシステムを修得し、BMS 専攻（修士課程）の 2 年間で独自の（世界初の）疾患モデルマウスを作製・解析してもらいます。そして、これらの経験を通して医学・薬学に貢献する研究者としての視点を培うことを目指します。

生化学・分子生物学講座

Department of Biochemistry and Molecular Biology

生化学・シグナル統合学分野

(2022 年 10 月入学・2023 年度第 1 回は募集しません。)

分子細胞生物学分野

鈴木 聡 (e-mail: suzuki@med.kobe-u.ac.jp)

がんは死因の第1位であり、人類にとっては最も脅威で、何よりも優先的に研究すべき対象疾患です。我々は分子生物学・細胞生物学・生化学・発生工学などのあらゆる技術を駆使して、がんの発症・進展の分子メカニズムの研究を行っています。がん抑制遺伝子シグナルとして最も代表的な p53 経路・PTEN 経路・Hippo 経路シグナルに關与する分子の遺伝子改変動物を多数作製し、これによって、(1) これらシグナル経路の異常が種々のがんや、自己免疫病・心不全・糖尿病などがん以外の主要な疾患の発症・進展にも關与すること、(2) 個体の発生・分化にも重要であること、などを明らかにしつつあります。またこれらシグナル経路を標的とする新規抗がん剤の開発にもチャレンジしており、これらマウスは薬剤の効果判定にも非常に有用となります。我々は、これらのアプローチにより、がんの発症・進展メカニズムとその治療戦略を科学します。(<https://www.med.kobe-u.ac.jp/mcb/research/> を参照してください)。

膜生物学分野

伊藤 俊樹 (e-mail: tito@people.kobe-u.ac.jp)

細胞膜を介したシグナル伝達機構は、生体の恒常性を維持するために最も重要なメカニズムの一つであり、その異常は免疫不全、がん、神経変性疾患など数多くの重篤な疾病につながります。中でも、がん細胞を特徴づける「無秩序な増殖」と「浸潤・転移」は、いずれも細胞膜を介したシグナル伝達の異常と、大規模な膜の動態変化によってもたらされます。本研究室では、細胞膜を構成するリン脂質の代謝と相互作用ネットワークに着目し、がん細胞における運動性向上のメカニズムと、メンブレントラフィック異常による細胞増殖機構に関する研究を行なっています。特に、これまで意義が不明であった「生体膜の曲率」という新たなパラメーターに着目し、リン脂質シグナルの異常が引き起こす重篤な疾患の発生機序に迫ろうとしています。また、それらの成果から「細胞膜の形状」を標的とする、全く新しい分子創薬の概念を確立するべく研究を展開しています。

薬理学分野

古屋敷 智之 (e-mail: tfuruya@med.kobe-u.ac.jp)

厳しい環境や過酷な状況によるストレスは、心身の機能に多様な影響を与えます。例えば、短期的で克服可能なストレスはストレスに対処するための適応的な反応を促し、ストレスに対する順化や抵抗性（レジリエンス）を高めます。一方、長期的で克服不可能なストレスは抑うつや不安亢進、認知機能障害を誘導し、うつ病など精神疾患や多様な身体疾患のリスクを高めます。その場合でも全ての個体で抑うつや不安亢進が生じるわけではなく、ストレス感受性には大きな個体差があり、ストレスに対するレジリエンスの存在が推測されます。しかし、ストレスやレジリエンスのメカニズムには不明な点が多く、ストレスに着目した治療法開発は確立していません。また、脳の老化でもやる気や認知機能の低下が生じます。脳の老化にも大きな個体差があり、レジリエンスの存在が推測されますが、実態は不明です。当分野は、ストレスによる心身の変化や脳の老化、レジリエンスを司る生物学的基盤を解明し、うつ病を始め心身の病を克服する革新的医薬品の開発を目指しています。現在は以下の研究を推進しています。

1. ストレス・老化による脳機能変容とレジリエンスに関する神経・グリア細胞に関する研究
2. ストレス・老化による脳機能変容とレジリエンスに関する神経回路に関する研究
3. ストレス・老化による脳機能変容とレジリエンスに関する脳・末梢臓器連関に関する研究
4. ストレス・老化による脳機能変容とレジリエンスに関する多階層オミクスデータ統合に関する研究

病理学講座

Department of Pathology

病理学分野

(2022年10月入学・2023年度第1回は募集しません。)

病理診断学分野

(2022年10月入学・2023年度第1回は募集しません。)

微生物感染症学講座

Department of Microbiology and Infectious Diseases

臨床ウイルス学分野

森 康子 (e-mail: ymori@med.kobe-u.ac.jp)

臨床ウイルス学分野では、主にヘルペスウイルスの感染機構を明らかにし、病態解明や制御法開発に繋げることを目指しています。ヘルペスウイルスは、一度宿主に感染すると潜伏感染状態となり、宿主と生涯を共にします。宿主の免疫低下時にウイルスは再活性化し、宿主に病気を引き起こします。ウイルスはどのような機序で再活性化し、どのようにして宿主に病気を引き起こすのでしょうか？これはヘルペスウイルス学にとって未だ解明されていない大きな謎です。そこで我々は、ヘルペスウイルス感染時に変動するウイルスおよび宿主因子の機能を分子及び個体レベルで解析することによって、ウイルスの再活性化及び病原性発現機構の解明を目指しています。また、新型コロナウイルス感染症の病態解明や制御法開発に関する研究も行っています。研究室では、海外からの留学生も多く、国際色豊かな環境下で研究を進めています。一緒に未知なるウイルス学の世界を探索しましょう。

感染制御学分野

勝二 郁夫 (e-mail: ishoji@med.kobe-u.ac.jp)

感染制御学分野では肝炎ウイルス（C型、B型）のウイルス増殖や病原性、肝発癌の分子機構の解明と新規の感染症制御法の開発を目指しています。B型肝炎ウイルスの増殖を阻害する新規阻害剤の探索、C型肝炎ウイルスによるシャペロン依存性オートファジーによる病原性発現機構を解析しています。ウイルスは自律増殖できず、宿主細胞の機能を巧みに利用して、ウイルス増殖に適切な細胞環境を構築し、ウイルス増殖の過程でヒトに癌などの重篤な病態を惹起します。私達はウイルス-宿主相互作用という観点からウイルスと細胞の両側面から研究を進めています。研究では分子生物学的手法と組換えウイルスを用いたリバースジェネティクスを用いて解析しています。また、肝炎ウイルス以外にユビキチン-プロテアソーム系を標的にした創薬研究や、インドネシアにおける下痢症ウイルス（ノロウイルス、ロタウイルス）の分子疫学研究など幅広い研究を進めています。さらに、新型コロナウイルス SARS-CoV-2 の免疫回避機構および病原性発現機構の研究を行っています。感染症学はミクロの世界からグローバルな感染流行まで幅広くダイナミックな研究領域です。感染症に興味がある方は是非一緒に研究しましょう。

地域社会医学・健康科学講座

Department of Social / Community Medicine and Health Science

バイオリソース研究・開発推進学分野

松岡 広 (e-mail: matsuo@med.kobe-u.ac.jp)

高齢化により、がん・認知症・フレイル等が増加し、社会的・経済的な影響が懸念されています。そこで、患者数自体の増加を抑制するための「発症前診断」法や予防介入法、更には、先制医療や個別化医療の進展が求められています。

バイオリソース研究・開発推進学分野では、診療科と共同して、血液や組織などの実診療由来の「ヒト検体」を研究対象とし、疾患の早期診断、治療効果予測、再発リスクの評価に有用なバイオマーカーの探索を行っています。また、患者検体から同定したバイオマーカーの候補遺伝子を mimic して発現する細胞株を、ゲノム編集技術により作製し機能解析を行うことで、疾患進展のメカニズムを実証する研究も進めています。また、術前リキッドバイオプシーによる予後予測モデルを構築し、精密ロボット手術の再現性を向上させる研究（AI研究者との共同による集合知構築）にも取り組んでいます。これらの研究を通して、患者個別の最適化医療の実現に貢献することを目指し

ます。

また、当分野では、トランスレーショナル領域における臨床研究計画の立案や遂行方法、倫理的・法的・社会的課題に対する学習も可能です。

【現在遂行中のプロジェクト】

- ・筋浸潤性膀胱癌患者に対するリキッドバイオプシーを用いたバイオマーカーの探索（「個別化精緻手術支援予後予測モデル研究」@神戸未来医療構想）
- ・甲状腺未分化癌の脱分化機構の解明及び早期発見バイオマーカーの探索
- ・複数耐性機序同時克服による新しいがん併用療法の開発
- ・リンパ腫患者由来 B リンパ球を用いた自然免疫分子に対するヒトモノクローナル抗体の網羅的取得

生物統計学分野

（2022 年 10 月入学・2023 年度第 1 回は募集しません。）

橋渡し科学

真田 昌爾 (e-mail: ssanada@med.kobe-u.ac.jp)

橋渡し科学では、新しい用途の医薬品・医療機器などが開発・上市に至るまでの臨床開発・臨床研究が近年ますます複雑化・長期化する中、より良い医療エビデンスを構築し、またより先進的な医療技術・製品をより早く社会に届けて医療の発展に資するために、臨床開発・臨床研究を、研究倫理や被験者保護を踏まえつつより効率化するプロセスを「科学」します。例えば医療開発にかかる研究システムや制度、さらには有用で効率的な臨床研究デザイン・管理・実施の体系や、それらを支える支援及び人材の教育・開発のあり方に至る、幅広い評価・改善・実践に関する研究を進めます。

医薬食品評価科学分野

坂本 憲広 (e-mail: nori@med.kobe-u.ac.jp)

医療情報学は、情報科学と医科学の学際領域であり、保健医療分野におけるあらゆる事象を認知し、記述し、管理し、さらに解析するための方法論を研究する学問である。同時に、その方法論を診療および医学研究に応用する実学でもある。現在の医療情報学の大きなテーマの 1 つは電子カルテの研究開発である。電子カルテは現代社会における、もっとも重要な社会システムであり、もっとも複雑なコンピュータシステムである。本分野では、その基盤技術である、ネットワークセキュリティ、ドメインモデリングを中心に研究を行っている。また、これまでゲノム情報処理は生命科学研究の一環としてのみ捉えられてきたが、医薬食品評価科学分野では近未来のポストゲノム医療を支えることを目標に、臨床医学のためのゲノム情報処理を臨床ゲノム情報学として提案し、研究を進めている。

疫学分野

（2022 年 10 月入学・2023 年度第 1 回は募集しません。）

法医学分野

（2022 年 10 月入学・2023 年度第 1 回は募集しません。）

内科系講座

Department of Internal Related

薬剤学分野

矢野 育子 (e-mail: iyano@med.kobe-u.ac.jp)

薬物治療の個別化・最適化に向けた臨床薬理研究を基礎と臨床の両面から行います。

1. スペシャルポピュレーションに対する治療最適化のためのファーマコメトリクスの応用

血中濃度を測定することが困難である特殊患者集団（小児、妊婦、高齢者など）に対して数理的な手法に

より薬物動態や薬効・副作用を予想します。

2. 分子標的型抗がん薬による副作用発症機構の解明とバイオマーカーおよび予防法の開発
分子標的型抗がん薬の特異的な副作用（手足皮膚反応、間質性肺疾患など）のメカニズムを基礎的に解明し、臨床におけるバイオマーカーの特定や新規予防薬を探索する研究を行います。
3. パーキンソン病発症機構の解明と新規治療薬候補の探索
パーキンソン病発症メカニズムを解明し、新たな治療標的となる分子を探索します。また、ドラッグ・リポジショニングによる新規作用機序に基づくパーキンソン病治療薬候補についても探索します。

幹細胞医学

青井 貴之 (e-mail: ipsc@med.kobe-u.ac.jp)

幹細胞は自己複製能と分化能を持つ細胞です。生体内には多様な種類の幹細胞が存在し、個体発生や組織の恒常性の維持という生理的現象において重要な役割をことが知られているのに加え、腫瘍をはじめとする様々な病態についても、幹細胞の機能異常としての理解が近年進んでいます。また幹細胞を用いた再生医療や創薬の臨床応用例も多くみられるようになってきました。幹細胞医学分野では、幅広い臓器や疾病領域に関して、幹細胞に焦点を当てた様々な生命現象の理解や、iPS 細胞をはじめとするヒト幹細胞を扱う技術を活用した病態モデル構築や再生医療技術の開発に取り組んでいます。

地域密着型医学物理スペシャリスト養成コース

佐々木 良平 (e-mail: rsasaki@med.kobe-u.ac.jp)

近年、IMRT を始めとする高精度放射線治療の需要は急増しており、その高精度放射線治療の品質管理、放射線治療計画の主軸を担う医学物理士が求められています。本コースでは将来、医学物理士として放射線を用いたがん治療を担う意欲のある理工系および放射線技術系出身の学生を募集し、放射線腫瘍学、医学物理、放射線生物学を総合体系的に教育します。放射線治療装置の精度管理、品質管理という側面を実習すると同時に、がん治療学、放射線腫瘍学を医師と共に学習し、放射線治療の基礎知識や最新の治療方法のアップデートを修得することを達成目標とします。本学医学部附属病院での実習以外にも、神戸低侵襲がん医療センターや関連病院での実習も検討しております。